

原 著

# 特別養護老人ホーム入居高齢者への家族の関わりを支えるもの —最期まで通いつける家族を対象に—

寺 尾 洋 介 (東京医療保健大学医療保健学部看護学科)  
高 橋 良 幸 (千葉大学大学院看護学研究科)  
正 木 治 恵 (千葉大学大学院看護学研究科)  
谷 本 真理子 (東京医療保健大学医療保健学部看護学科)

本研究の目的は、特別養護老人ホーム入居高齢者への家族の関わりを支えるものを明らかにすることである。特別養護老人ホーム入居高齢者の家族5名(男性2名、女性3名、看取り介護ケアが導入されている高齢者3名の家族を含む)を対象に、半構造化インタビュー及び、家族-高齢者間の面会場面の参加観察からデータ収集を行い、質的統合法(KJ法)を用いて個別分析と全体分析を行った。

全体分析より特別養護老人ホーム入居高齢者への家族の関わりを支えるものとは、【家族の関係：時・場所を超えて変わらない家族の関係性】【ホームでの出来事：関わるから得られる不思議さを伴う発見】【ホームでの出来事：ホームで支えられる双方の平穏】【ホームでの出来事：安楽・希望に繋がる日常の繰り返し】【繋がろうとする欲求：生老病死を受容しながらの愛情の共有】【繋がろうとする欲求：厳しい介護経験を超えての社会発信】の6つのシンボルマークから成る空間配置を示した。

結果より、高齢者が衰退する中でも平穏で在り続けることで、家族自身の自己欲求を満たし、社会化をもたらし、家族自身の存在を支え直すものと考察された。家族-高齢者双方を支えるために高齢者が平穏で在り続ける援助の必要性、並びに家族がケア提供者と共に高齢者と関わり、家族の自己肯定感と家族-高齢者双方の安寧をもたらす援助の方向性が示唆された。

KEY WORDS : Basis, the relationship of families with elderly people, end-of-life period, nursing home

## 1. はじめに

日本は、核家族化の進行により高齢者夫婦世帯、高齢者独居世帯の増加、三世帯同居家族の減少<sup>1)</sup>のように家族形態が変化している。鈴木は、介護を支えるための家族機能が弱体化し、介護を支え切れなくなっている現状<sup>2)</sup>を述べている。

石飛は、特別養護老人ホーム(以下ホームと記す)は、介護に苦しむ家族にとっての現代の「駆け込み寺」である<sup>3)</sup>と述べている。今後、介護施設での看取りは現在の4.5万床から9万床を要するとされ<sup>4)</sup>、ホームで看取りを行う家族の増加も予想される。

ホームに高齢者を預ける以前に家族の多くは、在宅介護を経験する。在宅介護における家族介護者研究では、介護経験がもたらす豊かさ<sup>5)</sup>や介護経験の意味付け<sup>6)</sup>が明らかにされていた。石本は、終末期がん患者を在宅

介護する家族に豊かさをもたらす出来事<sup>7)</sup>として、[これまでの日常的な交流から生まれる出来事]を含む4カテゴリーを明らかにした。介護経験によってもたらされた豊かさや意味づけは、日々の家族、被介護者間の日常的な関わりの中で生み出されていたと言える。

一方、在宅介護継続が難しくホームに高齢者を預ける家族も存在する。ホームに高齢者を預ける選択は、家族を介護負担から解放すると同時に、家族自身の選択に対する、迷いや葛藤を生じさせる<sup>8), 9)</sup>。Hsiuらは、家族としての義務や高齢者への贖罪を果たすために家族はホームを訪れる<sup>10)</sup>と述べている。しかし、家族は義務や贖罪を果たすためだけにホームに通うのだろうか。深堀らは、ホームで施設家族介護を行うことで家族自身が肯定的感情を持つこと、入居者に良い効果があったと家族自身が実感することが施設に通う動機づけとなっている<sup>11)</sup>と示した。先行研究が示すように、家族は高齢者とホームで関わる中で、家族自身が得ているものがある。高齢者と関わり続けることで得るものが、高齢者へ

受理：平成26年4月5日 Accepted：19.8.2014.

家族が関わる動機づけとなり、関わりを循環させ、家族－高齢者の関わりを支えるものに繋がると考えた。

筆者は、終末期をホームで過ごす高齢者と家族に対する看護援助として、家族－高齢者が過ごすその時を支える必要性を感じていた。先行研究でも、ケア提供者（専門職）が高齢者へのケアを家族と共に行うことで、高齢者－家族双方の平穏をもたらすこと<sup>12)</sup>が示された。

そのようなケアを実施していきたいが、そのためには、まず、家族が高齢者のもとに通い関わる必要がある。家族がホーム入居高齢者のもとに通い関わり続けるという、その家族の関わりを支えるものをまず明らかにし、ホーム入居高齢者への家族看護の示唆を得ることを目的として、本研究に着手した。

## II. 目的

本研究の目的は、高齢者が最期を迎えるまで、高齢者のもとに通い関わり続けようとする家族を対象に、特別養護老人ホーム入居高齢者への家族の関わりを支えるものとは何かを明らかにすることである。

## III. 本研究の意義

本研究は、ホーム入居高齢者が最期を迎えるまで、家族が高齢者と関わり続けることを支え、家族が高齢者と共に過ごす今その時を意味づけられるようにするための看護援助への示唆が得られる点で意義がある。

## IV. 用語の定義

1. 関わりを支えるもの：家族が日常的に高齢者と関わる中で家族が得るものであり、高齢者と関わり続けるための基盤となるものとする。

2. 最期まで通い関わりを持ち続ける家族：高齢者の終末期について日本老年医学会の立場表明<sup>13)</sup>は、高齢者の予後の予測は難しいとしている。本研究では病みの軌跡 (trajectory)<sup>14)</sup>において下降期～臨死期に在る高齢者の家族とし、ホームで終末期ケアを受けている、もしくは終末期ケアを受けることが予想される高齢者のもとに定期的に通い、食事介助や散歩、レクリエーション、高齢者の傍にいる等、ホーム内で高齢者と面会し、何らかの日常的な関わりを持ち続けている家族とする。

## V. 研究方法

1. 研究対象施設の選定基準：首都圏にある高齢者の終末期ケアを積極的に行っているXホームを研究対象施設とした。Xホームの入居者定員は120名、入居者平均年齢88.1歳、入居者平均要介護度4.23であり、従来型ケア

体制の施設である。看護体制は常勤看護師10名、夜勤看護師常駐の施設である。平成18年度より施設での終末期ケアを実践しており、平成23年度死亡退所者23名中17名の終末期ケアを施設で行っている。

2. 研究対象者選定基準：研究対象者は終末期ケアが導入されている、もしくは終末期ケアの導入はされていないが、今後、施設での終末期ケアを受ける意向を持つ高齢者家族と高齢者である。家族の選定基準は高齢者のもとに通い日常生活の中で食事介助や散歩、レクリエーション、高齢者の傍にいる等、何らかの関わりを持ち続けている家族とした。本研究では8組の家族－高齢者が対象者候補として挙げられ、最終的に5組の高齢者家族と高齢者に研究協力を依頼し5組の高齢者家族と高齢者から研究協力の同意を得た。3組は、家族の精神的動揺が強すぎる、家族が体調不良で来館できないとの理由から施設側で対象者から除外された。

3. データ収集期間：平成24年5月～9月。

4. データ収集方法：高齢者の家族へのインタビューと、高齢者と家族の面会場面における関わりの参加観察法にてデータ収集を行った。入居高齢者への家族の関わりを支えるものは、ホームでの家族－高齢者間の日常的な関わりの中から生まれてくるものと考え、より豊かに関わりを支えるものを記述するためにインタビューと参加観察法を併用した。インタビューは、過去、現在、未来における高齢者への家族の支えるものを十分に理解するために、高齢者との過去の生活から家族が得てきたものは何か、今、ホームに住む高齢者と共に過ごすことの意味、ホームに通い続けることを支えているものは何か、などの内容を含む半構造化インタビューを実施した。参加観察法は、家族が高齢者と日常的にホームで行う食事介助、散歩、居室での何気ない会話等の関わりの場面でを行った。

5. 分析方法：インタビュー、参加観察法から得た両データを分析対象とした。家族の関わりを支えるものを明らかにするために、バラバラな断片情報から論理的な整合性を持った統一体として全体像を表すことが出来る質的統合法 (KJ法)<sup>15)</sup>を分析方法に採用した。本研究ではテーマに沿って各対象者の個別分析と全体分析を行った。

1) 個別分析手順：入居者家族のインタビュー逐語録と面会場面の参加観察記録から、高齢者と家族の関わりを支えているものは何であるかを明らかにした。

(1) ラベル作成：「特別養護老人ホームで暮らす高齢者〇〇氏の家族□□氏は何を支えにしながら高齢者と関わっているのか」という中心的な志が入るようにデータを単位化し、元ラベルを作成した。

(2) グループ編成：取り出したラベルを、カードにし、卓上に並べ、カードを繰り返し読み、カードの類似性で集め、グループの内容を表すような一文を考え、それを「表札」として記述していった。この工程をグループ編成として以降同様に5～7のラベルになるまでグループ編成を繰り返し行い最終ラベルとした。

(3) 空間配置図の作成：最終ラベルの関係性に着目し、一貫した相互関係を表すように空間配置を行った。最終ラベルの空間配置にシンボリックに表現したシンボルマークを付け、空間配置を示した。

2) 全体分析手順：全体分析は個別分析の最終ラベルから、2段階下のラベル用いて類似するラベルでグループ編成を行った。5～7のラベルになるまでその工程を繰り返し、最終ラベルとし、空間配置を示した。浮かび上がった空間配置の位置関係を検討し、各最終ラベルに【事柄：エッセンス】としてシンボルマークを記述した。

3) 分析の信頼性・妥当性の確保：分析過程は、高齢者看護及び、終末期看護に関する研究、かつ質的統合法に精通した研究者のスーパーバイズを受け、信頼性、妥当性の確保に努めた。

6. 倫理的配慮：本研究を開始するに当たり、研究対象施設職員、高齢者、家族への書面、口頭によって研究の趣旨、方法、個人情報保護について説明した。研究対象

候補者へは研究参加の自由意思と途中辞退の保障、研究参加の意思決定への時間を設けた後に研究参加の同意を得た。意思決定が難しい高齢者に対しては、家族の代理意思決定をもって、研究参加への同意とした。インタビュー及び、参加観察は毎回、高齢者、家族双方の同意を得てから実施した。実施の際は対象者の体調を最優先に確認し、体調がすぐれない時はすぐに中断し、職員に報告し、職員、研究者共に対象者の体調の安定確保に努めた。家族へのインタビューはプライバシー確保のために基本的に施設内の個室を利用したが、対象者の希望によっては各入居フロアのロビーなどでインタビューを実施することもあり、家族、高齢者の意思を最優先にインタビューの場を選定した。本研究は千葉大学大学院看護学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した。

## VI. 結果

1. 研究対象者及びデータの概要：研究対象者は、ホーム入居高齢者家族5名と高齢者5名である。家族らが高齢者をホームに預ける理由として、多重介護による介護負担（4名）、仕事と介護の両立困難（1名）が挙げられた。研究対象者属性は（表1）に示す。インタビュー及び参加観察法から得られたデータ量・分析対象元ラベル数は（表2）に示す。

表1 研究対象者属性

家族	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏
家族続柄/ 来館頻度/ 年齢	義理の息子/ 週1, 2回/ 60歳代	義理の姪/ 月2, 3回/ 60歳代	嫁/ 週1, 2回/ 50歳代	長男/ 週1, 2回/ 70歳代	長女/ 週2回/ 60歳代
高齢者	a氏	b氏	c氏	d氏	e氏
年齢/性別	90歳代/男性	90歳代/女性	80歳代/女性	100歳代/女性	90歳代/女性
看取り介護 <sup>*</sup> の導入	無	有	有	有	無
高齢者の転帰	調査終了4か月後 永眠される	調査終了3日後 永眠される	現在 <sup>**</sup> もホームで 生活中	調査終了半年後 永眠される	現在 <sup>**</sup> もホームで 生活中

※看取り介護とはホームで提供されている終末期ケアのことである。

※平成25年2月現在を示す。

表2 データ量・分析対象元ラベル数

家族	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏
家族へのインタビュー 回数・時間/ 参加観察日数・場面数	3回・226分/ 3日間・5場面	3回・180分/ 3日間・5場面	4回・187分/ 3日間・6場面	1回・107分/ 1日間・1場面	5回・338分/ 3日間・11場面
個別分析対象 元ラベル数	107枚	187枚	121枚	100枚	104枚
全体分析ラベル数	80枚				

2. 特別養護老人ホーム入居高齢者への家族の関わりを支えるもの：個別分析結果から得られた最終ラベルより2段階下のラベル80枚を用いて全体分析を実施した。その結果、6つのシンボルマークが抽出された。本稿では全体分析に焦点を当て説明する。以下、【シンボルマーク】、〈最終ラベル〉、元ラベル（下部に破線を表記する）と表記する。また、元ラベルに「研：」と表記されているものは研究者の質問を表している。

#### 【家族の関係：時・場所を超えて変わらない家族の関係性】

このシンボルマークの最終ラベルは、〈私は、心揺れつつ家族らからの支えを持ちながら高齢者と関わり続け、高齢者は、過去の記憶を重ねながら今を生きるように、私と高齢者、私を支える家族の間には、時や場所を超えて変わらず在り続けるものがある〉であった。

A氏は、a氏と散歩をしながらa氏が表現するホーム入居後も変わらない一面について語った。

（研：このホームで暮らしているaさんを見て思うことはありますか？）彼の世界を生きているよ。何ていうかな、彼はね、どこ行っても変わらない。家族と一緒にいるときも、ここ（ホーム）にいてもね。社会的な能力とかはだんだん退行していつているけどね。だけど、彼自身は、彼の世界を今、ここで生きていると思うよ。

E氏は、e氏をホームに預けた後も自宅で行っていたことを継続することの意味について語った。

「それに、施設に入れたかどうかということとは別に、私にとってこうやっておばあちゃんのところに来るのが、昨日の続きの今日なの。」研：「昨日の続きの今日……ですか。」E氏：「だから、別に特別なことじゃないってこと。本当だったら、家でずっと見てあげられれば良いけど、いろんな事情でそうもいかないでしょ。だけど、場所が変わっても続けられることっていうのは何かあって、だからこうやってきているの。」研：「ここに通ってe氏と関わりつけられることはEさんにとっていつもの日常の事？」E氏：「そうよ。」

#### 【ホームでの出来事：関わるから得られる不思議さを伴う発見】

このシンボルマークの最終ラベルは、〈ホームに通いながら、高齢者と過ごす時間は、互いに平穏に過ごせたらと思うし、今なお高齢者がふと見せる反応から、私に驚き、不思議さを伴った温かく心地よい感情をもたらす〉であった。

B氏は、下肢壊疽した状態で臥床している、臨死期に在る苦痛の無さそうなb氏のベッドサイドでb氏の髪を

毛や肩をさすりながら不思議な感覚を語った。

認知症で鈍くなっているんでしょうか？痛みとか……そういう苦しいとかそういうことも感じないで過ごせているのかなって思うと、いろんな症状があるんでしょうけど、認知症って、今回、叔母の与えられている（寝たきりで下肢壊疽が進行している）状況から見た時に、こんな状態なのにどうして苦しまないんだろうって。そういう風に思っています。今。

E氏はe氏の食事介助に訪れている。e氏のテーブルで昼食の介助をしながら、他の入居者も気かけ声をかけている。e氏の昼食介助をしながら、他の入居者にも関心が向き、自らが癒されていることを語った。

（研：今、癒されるって言葉が出ましたが、具体的に何に癒されているんでしょうか？）E氏：それは人でしょ。あいつら達人で怪物でしょ。怪物だよ。やっぱり。人となりかね。もうね、棟梁（昔大工の棟梁をしていた入居者）なんてしみじみしちゃうよ。あの我慢強さとか、ハンサムだし。うん。ここに至ったまでに（棟梁には）何があったんだろうって思っちゃうよね。で、縁あってここにいるわけだね、そういう部分もあるから次、また来られるんだと思う。それもあるよね。だから1個だけじゃないんだと思う。家のばあちゃんのためだけにここにきているわけじゃないんだと思うんだよね。功德がありますって感じでね。

#### 【ホームでの出来事：ホームで支えられる双方の平穏】

このシンボルマークの最終ラベルは、〈ホームは、負のイメージとは異なり、高齢者の容態が悪化する中でも、周囲の皆の見守り、ケアに温もりを感じ、高齢者本来の姿で社会の中にいられ、高齢者、家族が最期まで平穏で在れる場だ〉であった。

C氏は、ホームのロビーに貼ってある新聞の切り抜きを見てc氏の最期を迎える場について語った。

その（ホームのロビーに貼ってある）新聞記事に「とてもありがたかった。うちの女房をここで看取ってもらった。」って。それはね、言葉では言い尽くせないほどね、本当に良くしてくれたっていうお礼の手紙がね。「あ、これはととても温かい一人一人を大事にしてくださっているな。」ってことが解ったんでね。（中略）おばあちゃんの出血がすごく増えてとか、いろんな状況が考えられますよね。だから、おばあちゃんの状況に応じては（看取りの場所を）変更することもあるかもしれない。でも、できればここでね、最期をね、病院で亡くなるのも、家で亡くなるのもどこで亡くなるのもおんなじなんですけど、できればここで、まあ、自宅？というような

形で看取ってもらった方がいいのかなって。

E氏は、恩師の教えから「老人の死」について語り、e氏が（ホームという）社会の中で生きることを語った。

（前略）（E氏の恩師の教えから）「老人の死にゆく過程」の3重丸があって、3重丸の中心が体で、それで、人間の死は3つあるって言っていたの。1番外側の丸は社会だって。2番目は精神、で最後（円の中心）は体だって。だからね、まず、老人で社会的に死んじゃうんだって。スポイルされてね。その次に精神的に、それで最後に脈が無くなって亡くなると。だからね、おばあちゃんにとっての社会的なものをなくしちゃいけないって思っていたんです。それはね、老人会とか行かなくなっても、ここの中でも社会でしょ。おばあちゃんのいるリビングとかダイニングとかね。その中でone of themでいることがね、今のおばあちゃんの社会だから、その一員であることを削ることは無いなって。

#### 【ホームでの出来事：安楽・希望に繋がる日常の繰り返し】

このシンボルマークの最終ラベルは、〈衰えゆく高齢者と過ごす今の時は、別れや喪失を予感し悲しいと感じてもなお、今だけは日常を繰り返すことで別れの苦なく楽でいられ、これから先も身の処し方を考えつつ新たな支えを予感する〉であった。

D氏は、100歳を過ぎる母とのホームでの関わり（日々の散歩や別れの挨拶）を通して、いずれ来るだろう母との別れ、その後自らが生きていくための支えについて、d氏との面会中にたびたびに語った。D氏は、d氏との日々の別れの挨拶について、辛さを感じずに日常を過ごすようにする心を語った。

（前略）だから（オフクロが）「行ってらっしゃい」って言うまで自分はね、待ってる。だから、要するに、だって「ああ、行っちゃった。悲しいな。」ってずっと思ったらね、そういう思いだけでいるよりは「また来てくれる」「また来るんだ」って思いで別れる方が、いいでしょ？恋の別れだってそうでしょ？死に別れとかいろいろあるけど、今日だけの別れだったらまた明日会えるでしょ。（笑）ちょっと冗談だけど、今の、家のオフクロはそれができている。

D氏は、日々の介護を通して母・妻を亡くしても、また支えは生まれてくると見通せる、ということ語った。

ただね、誤解してもらっちゃ困るのはね、今、私はオフクロ、女房の2人に支えてもらっている。じゃあ、2人が無くなったらその支えがなくなっちゃうのかって言うと、それは違う。支えていうのは必ず生まれてくる。違う形で生まれてくる。だから人間って大丈夫な

んだよ。だって人は生老病死でしょ。死んで亡くなっちゃったものはね、その後もいっぱい弔うでしょ。でも出てこないんだよ。（亡くなった方は現実には戻ってこない）でしょ。でも、また違った形で人を支えるその支えてのが出てくるのがこれまた人間の不思議なんだなあ……ってところだと思う。

#### 【繋がりとする欲求：生老病死を受容しながらの愛情の共有】

このシンボルマークの最終ラベルは、〈家族が日々共に在る事は、人の生老病死を受け入れつつ、思いや愛情を共有し模索しながら触れ、感じ、繋がりとする、人本来の自己欲求である〉であった。

C氏は面会時にc氏と体操を行っている。c氏と体操をしながら、体操を続けることの意味について語った。

「手なんてこんなにあげたってしょうがない。足なんてこんなあげたって何になるんだ。手なんて、あたしは上がらないんだから、上がらなくなっただけいいんだ！」そんなタイプ。だから、あえて私はやっているんです。やらないタイプだからやるんです。あえてね。私との関わりの中で、私に「こんなことをやってもらったなあ。」ってそんな印象をおばあちゃんにつけてもいいかなって。

E氏はe氏が私（E氏）を忘れていっても尚、e氏へ関わり続ける自身の思いを語った。

母ね、私が娘だってことは判らないかもしれない。いつからだろう？判らなくなってきたの。半年くらいの間なんだけど。秋ぐらいまで判っていたと思うんだけど。この人（母）がね、「いざとなったら私を助けてくれる人」って言う風に私のことを判ってくれていればそれでいいじゃない。別に私って判らなくてもね。

#### 【繋がりとする欲求：厳しい介護経験を超えての社会発信】

このシンボルマークの最終ラベルは、〈社会の皆が、翻弄されるほどの厳しい介護状況を感じ、ありのままの現状を感謝しながら受け入れ、考え、語りあうことで、私が気づいたように、新しい気づきがあり、介護に関わる皆がより良く過ごせるのではないかと〉であった。

A氏は介護の現状について、個々人が考え、対処していく必要性について語った。

人間と社会の限界っていうのがどこにあるのか皆考えるべきなんだよね。医療の限界、こういう人（ホームで暮らす人々のような）のケアの限界、皆が考えるべきなんだよ。やっぱりね、「あんたたちみんな考えなさい!!」っていうことが僕の考え方の序論なんだよね。

誰かに甘えられるってことはないんだよ。座るべき椅子はもうとっくに無くなっているんだから。(笑)ってこと。それをね、自分が子供の時から思っていてね、自分で考えて行動しなさいよって。それ以外ね、生き抜く方法ってないでしょ。

D氏は、ホームを訪れるボランティアの学生らに自らの体験を通しての学び、若者への希望を語った。

大学の生徒がここ(ホーム)に来た時に(自分のケツを拭けることは幸せだし、拭けない人の世話をすることで、自分も相手も双方が楽になるという)話をするといきなりびっくりしてしてね、これはジジイだから言えるよね。(中略)私はね、こんなことを70になってから気が付いたけど、もっと若いうちに気が付いていたら、もっとすごいでしょ。これがもっと若い人が気が付いて介護する人が増えれば。

以下、6つのシンボルマークから成る空間配置(図1)を示す。

空間配置図の叙述化：特別養護老人ホーム入居高齢者への家族の関わりを支えるものとは、時・場所を超えて変わらない家族の関係性という「家族の関係」が中心にある。それ故、関わるから得られる不思議さを伴う発見、ホームで支えられる双方の平穩、安楽・希望に繋がる日常の繰り返しという「ホームでの出来事」を相俟って経験する。家族はホームでの出来事を経験するからこそ、生老病死を受容しながらの愛情の共有や、厳しい介護経験を越えての社会発信という、対高齢者個人、対社会との「繋がろうとする欲求」が生じていた。

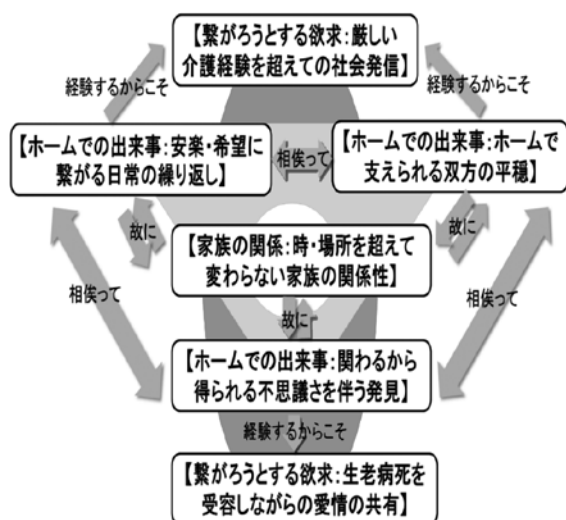


図1 特別養護老人ホーム入居高齢者への家族の関わりを支えるもの

## VII. 考察

結果より、特別養護老人ホーム入居高齢者の家族の関わりを支えるものとは何か及び、関わりを支えるものを支持していくための看護援助について考察する。

### 1. 特別養護老人ホーム入居高齢者への家族の関わりを支えるものとは

結果の空間配置に基づき考察する。まず、空間配置の中心にある【家族の関係:時・場所を超えて変わらない家族の関係性】について考察する。高道は家族-高齢者間で固有に培ってきたそれぞれの関係性がある<sup>16)</sup>ことを述べている。高齢者の住む場所が変わり、時間が経過しても、日々高齢者とホームで関わり続けることで、家族-高齢者間の固有の関係性の継続を実感するものとする。日々の高齢者との繋がりを実感できることで、【ホームでの出来事:関わるから得られる不思議さを伴う発見】を含む3つのホームでの出来事を経験する。特に、【ホームでの出来事:関わるから得られる不思議さを伴う発見】では、関わりの中で、家族は、高齢者の示す反応に不思議さや新たな発見をしていた。この結果は、Cartwrightが日々の暮らしの中で時に起こる Innovative routine breakers として示した結果<sup>17)</sup>と一致すると考える。高齢者の脆弱性が進行しても尚、日々関わる中で家族は、高齢者に様々な発見をすることで、高齢者へ関わり続けることを動機付けていると考える。そして、動機付けられるような発見は【繋がろうとする欲求:生老病死を受容しながらの愛情の共有】という対個人との繋がりを強めていくものとする。また、高齢者との日々の関わりの中で、【ホームでの出来事:ホームで支えられる双方の平穩】や、【ホームでの出来事:安楽・希望に繋がる日常の繰り返し】を経験し、【繋がろうとする欲求:厳しい介護経験を越えての社会発信】を行っていた。A氏、D氏のように自らの経験を他者に語り発信することは、他者と自らの経験を共有することになる。高齢者以外のホームを訪れる他者(他の入居者家族や学生)との間に生まれる繋がりによって、家族はホームに通い、高齢者と関わり続ける支えを得ていると考える。

結果より、特別養護老人ホーム入居高齢者への家族の関わりを支えるものとは、衰えゆく高齢者と家族が共に在ろうとすることで、家族自身の存在を肯定的に支えるものであると考える。村田は人間の存在は、時間存在・関係存在・自律存在に在る<sup>18)</sup>と述べている。家族は、高齢者をホームに預けた際に、高齢者を介護してきた時間、介護を通して高齢者と培ってきた関係、介護を自律的に行ってきた自らの役割を手放す。そのことで、自ら

の役割が揺らぎ、自らの存在も揺らぐ経験をしているのではないか。高齢者をホームに預けた後も家族は高齢者と関わり続けることは、自らの役割を果たし、自らの存在を支え直すものであると考える。

## 2. 特別養護老人ホーム入居高齢者への家族の関わりを支えるものを支持するための看護援助への示唆

結果を基に、看護援助への示唆を検討する。特に家族は【ホームでの出来事：関わるから得られる不思議さを伴う発見】を含む3つのホームの出来事を経験することによって高齢者への関わりが支えられていた。そこで、3つのホームの出来事から成る支えを看護者として支援するためには、まず、ホームで暮らす高齢者が最後まで安寧に暮らすことができる援助が不可欠であると考察する。高齢者の安寧な生活があるからこそ、家族はホームに安心して通い、高齢者と関わり続けられることが結果で示された。Kolcabaは、コンフォートケアこそが、対象者が最期まで安寧で在ることを保障し、同時に対象者に寄り添う家族には、対象者の最期の時に向き合う勇気と、対象者の最期を支えるための希望を与える<sup>19)</sup>と述べている。これらによって、ホームで暮らす高齢者が最期まで穏やかに過ごすことは、家族が高齢者をホームに預けた選択を肯定的に捉えることを促し、家族が安心して高齢者と関わり続けることを支えると考ええる。

次に、ケア提供者が家族とともに高齢者へケアを行うことも、ホーム入居高齢者への家族の関わりを支える援助になると考える。今回の研究対象者らは、ホームで暮らす高齢者が最期を迎えるまでホームに通い関わり続けようとする家族であった。メイヤロフは、ケアすること、されることをとおして、初めて究極的に心を安んじることができる<sup>20)</sup>と述べている。ケア提供者が家族と共に高齢者へケアを行うことは、家族に高齢者と最期まで関わられた、という実感と心の安寧をもたらすと考える。そのようなケアを提供することで、看護者は家族-高齢者間が日常的に関わり続けることを支援し【家族の関係：時・場所を超えて変わらない家族の関係性】という家族-高齢者間が繋がり続けることを支援することが出来る<sup>21)</sup>と考える。

## VIII. 本研究の限界と今後の課題

本研究は特別養護老人ホーム1か所における、ホーム入居高齢者と関わり続ける家族を対象にした結果である。ホームに通うことが難しい家族も存在するため、ホーム入居高齢者の家族全ての結果として一般化することは難しい。本研究を一般化するために、さらに研究対象者を増やすこと、今回対象とはならなかった、施設に

通うことが難しい家族の思いや支えを明らかにしていくことも必要である。そして、家族、高齢者双方が最期まで平穏で在れる看護援助とはどのようなものであるかを明らかにすることが今後の課題である。

## IX. 結論

特別養護老人ホーム入居高齢者への家族の関わりを支えるものとは、【家族の関係：時・場所を超えて変わらない家族の関係性】を中心とした6つから成るものであった。6つの支えるものとは、家族が高齢者と関わり続けることで、高齢者が最期まで平穏に過ごせ、家族自身の存在を支え直し、家族、高齢者双方が平穏で在ることを支えるものであった。6つの支えるものを支持していくために、高齢者が平穏で在り続けられる援助の必要性、並びに家族と共に高齢者に関わりケアを行うことで、家族、高齢者双方の平穏をもたらす援助の方向性が示唆された。

本論文を執筆するに当たり、ご協力いただいた多くの方々に感謝申し上げます。本論文は千葉大学大学院看護学研究科博士前期課程に提出した平成24年度修士論文の一部加筆、修正を加えたものであり、日本老年看護学会第18回学術集会（2013・大阪）において発表したものである。

## 引用文献

- 1) 厚生労働省統計協会：国民の福祉と介護の動向2013/2014.
- 2) 鈴木和子：現代の家族問題と看護. 田端邦治, 田中美恵子(編), 哲学 看護と人間に向かう哲学. 第2版, ヌーヴェルヒロカワ, 2004.
- 3) 石飛幸三：「平穏死」のすすめ 口から食べられなくなったらどうしますか. 第13版, 講談社, 2011.
- 4) 岡本浩二(厚生労働省大臣官房参事官)：地域保健の最近の動向より, [http://www.phcd.jp/katsudou/soukai/H20/H20-okamoto\\_sanjikan.pdf](http://www.phcd.jp/katsudou/soukai/H20/H20-okamoto_sanjikan.pdf). 2010.
- 5) Juliana C. Cartwright, Patricia G. Archbold, Barbara J. Stewart et al: Enrichment processes in family caregiving to frail elders. *Advanced in Nursing Science*, 17(1), 31-43, 1994.
- 6) 山本則子：痴呆老人の家族介護に関する研究 娘および嫁介護者の人生における介護経験の意味 4. 介護しなければならぬ現実と折り合う・介護の軌跡・結論. *看護研究*, 28: 481-500, 1995.
- 7) 石本万里子：終末期がん患者を在宅で介護する家族にもたらされる Enrichment, *日本がん看護学会誌*, 23(1), P31-43, 2009.
- 8) 奥山真由美, 西田真澄：特別養護老人ホーム入居申請をめぐる家族の意思決定. *山陽論叢*, 第17巻: 90-101, 2010.
- 9) Assumpta Ann Ryan & Hugh F. Scullion: Nursing home

- placement: an exploration of the experiences of family carers, *Journal of Advanced Nursing*, 32(5), 1187–1195, 2000.
- 10) Hsiu-Hsin Tsai. & Yun-Fun Tsai: Family members' perceived meaning of visiting nursing home residents in Taiwan. *Journal of Advanced Nursing* 68(2), 302–311, 2012.
  - 11) 深堀浩樹, 山本則子, 杉山智子他: 特別養護老人ホームの入居者に面会する家族が行う“施設家族介護”. *家族看護学研究*, 14(1), 10–20, 2008.
  - 12) 寺尾洋介, 高橋良幸, 谷本真理子他: 介護老人福祉施設における看取りの看護実践の経験～高齢者の人生で培われた意思を反映する実践に着目して～. *千葉看護学会 第17回学術集會集録*: 26, 2011.
  - 13) 日本老年医学会: 「高齢者の終末期の医療およびケア」に関する日本老年医学会の立場表明 <http://www.jpn-geriat-soc.or.jp/2011>.
  - 14) Pierre Woog編: 慢性疾患の病みの軌跡 コービンとストラウスの看護モデル (黒江ゆり子ら訳), 第5版, 医学書院, 2006.
  - 15) 山浦晴男: 質的統合法入門 考え方と手順, 第1版, 医学書院, 2012.
  - 16) 高道香織: 第Ⅷ章 尊厳ある介護と看取り 3家族介護者の生活支援. 正木治恵 (編), *老年看護学概論「老いを生きる」を支えることとは*, 第1版, 南江堂, 2011.
  - 17) 前掲5)
  - 18) 村田久行: 終末期がん患者のスピリチュアルペインとそのケア. *日本ペインクリニック学会誌*, 18(1): 1–8, 2011.
  - 19) キャサリン・コルカバ: コンフォート理論—理論の開発過程と実践への適用— (太田喜久子監訳), 医学書院, 2008.
  - 20) ミルトン・メイヤロフ: ケアの本質—生きることの意味 (田村真ら訳), 第14版, ゆみる出版, 2006.

BASIS OF THE RELATIONSHIP BETWEEN FAMILIES AND ELDERLY PEOPLE RESIDING  
IN NURSING HOMES  
—A STUDY OF FAMILIES VISITING ELDERLY PEOPLE IN THE END-OF-LIFE PERIOD—

Yosuke Terao<sup>\*</sup>, Yoshiyuki Takahashi<sup>\*2</sup>, Harue Masaki<sup>\*2</sup>, Mariko Tanimoto<sup>\*</sup>

<sup>\*</sup>: Tokyo Healthcare University

<sup>\*2</sup>: Graduate School of Nursing, Chiba University

KEY WORDS :

Basis, the relationship of families with elderly people, end-of-life period, nursing home

This research aims to clarify the basis for the relationship between families and elderly people residing in nursing homes. In Japan, nursing homes provide welfare facilities for elderly people requiring long-term care.

Data were collected using semi-structured interviews with two male and three female family members and participant observation of five family members and elderly people, three of whom were receiving end-of-life care in nursing homes. Individual and comprehensive analyses were performed using a qualitative synthesis method (the KJ method).

The comprehensive analysis focused on the basis of the relationship between family members and elderly people on six parameters: “the family’s relationship: the quality of family ties regardless of time and place”; “events at the nursing home: the extent of family member’s wondering discovery of the elderly’s new aspect obtained from related,” “events at the nursing home: the extent of feelings of ease and comfort among family members and nursing home residents”; “events at the nursing home: daily routines that engender feelings of calmness and hope”; “desire for connection: the extent of affectionate behavior in the face of birth, aging, sickness, and death”; and “desire for connection: the extent of the family’s release from challenging, albeit caring, tasks, and experiences.”

Although elderly people in nursing homes are losing their physical and mental vitality, the calmness they tend to express helps satisfy their family members’ individual desires to be part of the family, brings family members together, and supports the family as it rediscovers the very core of its existence. It is important that caregivers assist in the maintenance of elderly people’s tranquility to facilitate family members’ self-affirmation and to ensure that elderly people and their family members are both at peace.